

晩年の芥川龍之介

江口 渙

落合書店

晩年の芥川龍之介

江口
渙

晩年の芥川龍之介

定価一、五〇〇円

発行日／昭和六十三年七月十五日発行

著者／江口 渙

発行者／落合雄三

発行所／株式会社落合書店

宇都宮市西一―四―二 電話(〇二八六)三六―七二―一

振替宇都宮二三五九

印刷所／新日本印刷株式会社

ISBN4-87129-146-4 C3095 ¥1500E

目次

芥川君の作品	1
芥川龍之介と有島武郎	6
晩年の芥川龍之介(未発表ノート)	18
晩年の芥川龍之介	87
芥川龍之介の短歌	102
売り物に出た芥川龍之介の手紙	106
モデル考	
鶴は病みき	111
齒車	115

芥川龍之介三十年忌の夜……………119

私の小説について……………123

私の歩いた道……………130

わたしの処女作……………153

わたしの青春……………155

芥川龍之介の江口渙宛の書簡……………159

解説……………霧林 道義 170

江口 栄子

あとがき……………江口 栄子 178

表紙装画・岩崎幸子

芥川君の作品

(上)

○数多い新進作家の中で芥川龍之介君くらい鮮かに頭角を露わした者はない。志賀直哉・里見弴の二氏と並んで真に文壇の壯観である。芥川君が今度阿蘭陀書房から第一集「羅生門」を出した。それを機会に私はいささか同君の作品を是非してみた。

○芥川君の作品の基調をなすものは澄み切った理知と洗練されたヒュモアである。そして作者はいつも生活の外側に立って静かに渦巻を眺めている。それが必ずしも冷然と見詰めているのでもなくまた苛立ちながら眺めているのでもない。むしろ静かに味わいながら眺めているといった風なものは複雑な態度である。

○故にある種の人々は芥川君のこの態度を若さに似ない不自然な冷静であると非難する。しかしそれは人生の傍観者が理知に活きる必然の帰結であって、同時に芥川君の物の見方が常に一面的でないという証左でもある。

○すでに人生の傍観者である。従ってその作品の中には心を焼き尽くすような熱はない。また魂を

打ち砕くような力はない。しかしすべてに對する落ち着いた理解と同情とは過不及な形において現れている。善に對してもまた無論惡に對しても。かくて作者は理知に活きる人であるが故にその同情は時に轉じて柔な揶揄となり再轉して清楚な皮肉となるのである。

○しかもその理解と同情とが過不及な形において現れているがために作家を單純な常識家と断じ去るのは余りに酷である。なるほど「手巾」や「酒虫」や「忠義」に現れた倫理觀乃至は人生觀はついに文壇の高等常識以上に出ないかも知れない。しかし「羅生門」の下人の惡に對する憎惡や馴致や「芋粥」の五位に對する丹波出の若侍の同情や乃至は「猿」の候補生の犯罪兵に對する憐愍などは芥川君の持っている人間性の極めて高価な閃きがある。

(大正六・六・二八「東京日日新聞」)

(中)

○文壇では芥川君を新理知派とか新技巧派・新古典派とかのいろいろな名によって簡単に片付けようとしている。しかし文壇が同様簡単に片付けようとしている志賀里見の両氏が案外複雑であるように芥川君もまた案外複雑である。

○なんとすれば同君は取材においても態度においても一面回顧的没我的であるとともに他面において建設的であり主我的である、が東洋風の風趣と氣品と技巧の隱約とを備えているとともにまた近代風の透徹辛辣な觀照と結構布置の妙とを持っている。しかもそのすべてを包むに豊富な芸術的天

分と技術の上の刻銘な完成とをもってしている。この点において文壇の中老大家一人として芥川君に及ぶものはない。

○ことに注意すべきは芥川君が単なる主観的な古雅な物語の作家であると見せかけて案外性格描写に秀でていることである。なかならず「芋粥」の前半における性格描写は全く鮮かなものである。

○しかし私が特に不満に感じるのは描かれたるその心理が善の場合にも悪の場合にも単なる普通の善または悪をただそのままの形そのままの質において拡大しているに過ぎないことである。少しも病的なところ没常識的なところのないことで芥川君がとかく作の基調に熱と力を欠くのは是にも半ば因するのである。しかしこれは理智に活きる傍觀者の性格的に所持する欠陥である、故にともすればこの作者はいつまでも芸術の主潮の外側に立たなければならぬかも知れない。私は少からずこれを惜しむ。

○一つ一つの作品について言えば私は形式と内容との渾然融和こんぜんしている点で「鼻」を採り、切れ味の鮮かな点で「手巾」をとり、描写の水際立った点で「芋粥」を採る。そして芥川君のすべての長所が自然に交錯して現れている点でその準処女作である「羅生門」を推賞措く能わざる者である。

○私はかつて「猿」を激賞した。しかしその後取材の似通ったジュウル・クラルテエの「猿」を読みさらに芥川君の「猿」を読み返した時芥川君の「猿」に大分見劣りを感じた。芥川君の犯罪兵に対する理解は實際ヒューメンなものである。しかし猿の犯罪と水兵の犯罪との間に描写上多少の空隙がある上に、候補生が石炭庫で犯人を捕える前後の描写にもまた空隙がある。これに反してクラルテエの猿は遙かに自然でありヒューメンである。その上材料の組織化單純化においてさらに一段

の手練がある。

(大正六・六・二九 岡前)

(下)

○「孤独地獄」で作者が取り扱った主題は非常に好い。ただとかく説明に墮ちたため「孤独地獄」が充分立体的に描出されなかったのは遺憾である。「酒虫」は人によってはシンボルと見るかも知れない。しかし私には単なるアレゴリーとしか受け取れない。

○「羅生門」十四編の中で「忠義」と「尾形了齋覚え書」とが一番見劣りがする。「了齋覚え書」は中心の摺み方が覺束ない上に全体がいじけている。「忠義」は概念の具体化が足りない上に、板倉主理の狂乱が性格的であるか境遇的であるか必然であるか偶発であるかが不明のため、作者の倫理的批判の立脚地が薄弱に感ぜられる。作者はもっと主理の描写に力を入れて欲しかった。

○悪口を言ったついでにもう一つ芥川君の使う小道具にちよつと異議を呈出したい。それは「忠義」において狂乱後の主理に時鳥のことを口走らせたり「運」において藪に鶯を啼かせたりするのは一種の伝統主義とみても余りに古い。余りにティピカルであり固定的である。

○しかしそれは白壁の瑕瑾に過ぎない。とにかく「羅生門」は里見君の「三人の弟子」とともに確かに近來出色の文学である。しかも芸術的良心の熾烈な点だけでも片言隻語もいやしくもせず一行一句も無駄を書かない点だけでも充分敬意を払うに足る作品である。

○最後に「芥川君の作品は形式はあっても内容がない」という非難のはなはだ誤れることをいいたい。由來芸術家には形式から内容に入るのと内容から形式に出るとの二種がある。芥川君は無論前者である。故に芥川君にとっての形式の完成はやがて内容の完成である。この理を弁え^{わきま}ずいたずらに形式だけを見て内容を見ないのは無理解もまたはなはだしい。私は形式から入る種類の作家に代わってあえて一言芥川君のために弁ずる者である。

(大正六・七・一 同前)

芥川龍之介と有島武郎

一

世に知られた日本の作家の中で、明治この方、自殺した者が大分ある。旧くは北村透谷があり、日露戦争後には川上眉山があり、関東大震災以後には芥川龍之介がある。更に、芥川龍之介を模倣して生田春月も瀬戸内海へ投身自殺した。だが、若い女と情死したのは、後にも先にも有島武郎一人である。

今、どちらも自殺、情死という。とにかく自然死ならざる死、不自然死を死んだという点で共通点を持っている芥川龍之介と有島武郎との作品を読み返し読み較べて見ると、その間に、さまざまな点で可なりの距離や相違があるのが、なみなみならぬ興味を与える。其上、二人の文壇的名声が必ずしも作品の良し悪しと一致していないという皮肉な事実をも考え併せると、更に一層興味ふかい。このことは永井荷風などについても、矢張、同じことがいえる。荷風なども外国から帰って来て文名の揚がった時代よりもそれ以前の時代のものに却って好いものがある。まことにおろかしきもの、信賴するに足らぬものは、ジャーナリズムが勝手に造り出した所謂文壇的名声ではある。

芥川 の 作品 を 読 み 返 し て、こ と に 興 味 ふ か く 感 じ ら れ る の は、一 体 に「死」「自殺」「死の問題」を 取 り 扱 っ た も の が 多 い こ と だ。晩 年 に な る に 従 っ て そ の 傾 向 が 著 し い。そ れ が『点鬼簿』『玄鶴山房』に 到 っ て そ の 頂 点 に 達 し て い る。作 家 と な っ た 当 初 か ら、彼 は「死の問題」に 人 一 倍 の 強 い 関 心 を 持 た ざる を 得 な か っ た も の と 見 え る。そ し て、こ の 関 心 が 彼 の 異 常 に こ ま か い、壊 れ 易 い 神経 へ 奥 ふ か く 喰 い 込 ん だ こ と が、彼 を つ い に 最 後 の 自殺 へ 追 い や っ た 一 つ の 動 因 に な っ た の だ と 考 え ら れ な い こ と も な い。」

題材 の 点 か ら 見 て、芥 川 の 作品 を 大 別 す る と、『羅生門』か ら『偷盜』に 到 る ま で の、平 安 朝 も の が、先 ず 第一 に 挙 げ ら れ る。更 に『尾形了齋 覚え書』か ら『きりしとほろ上人』そ の 他 に 到 る ま で の 切 支 丹 も の が あり、第三 に は『忠義』か ら『お富の貞操』に 到 る ま で の 純 然 た る 歴史 小説 が あり、第四 に『父』か ら『秋』『玄鶴山房』に 到 る ま で の 現代 も の が あり、更 に『手巾』『大石内蔵之助』『將軍』等 々 に 到 る 自由 主義 的 観 点 か ら 封建 的 イデオロギー へ 挑戦 し た も の が あり、最 後に『不思議な島』や『河童』の よう な 若干 諷 刺 的 要素 を 持 っ た も の も ある。む ろ ん、こ の 他 に、『秋山図』の よう な 彼 自身 の 骨 董 癖 か ら 生 み 出 さ れ た も の や、『世の助の話』や『西郷隆盛』の よう な 一寸 し た 思 い つ き か ら 考 え 出 さ れ た も の も ある。だ が、大 体 に お い て、こ の 六 つ の 傾 向 は 彼 の 一生 を 通 じ て 彼の 作品 の 底 を 流 れ た 大 き な 基 調 で あ っ た こ と は い う ま で も な い。

第一 の、平 安 朝 も の は、作 家 と し て の 初期 時代 の 芥 川 龍 之 介 の 中 に、ま だ 若 々 し く 生 ぎ て い た ロマン ティズム が 生 ま せ た と こ ろ の も の で あ る。今 日 か ら 見 る と こ の 系列 に 属 す る 作品 の 中 に、傑 出した も の が 比較 的 多 い。中 で も、初期 に 書 か れ た も の の 中 に そ れ が 多 い。彼の 最初 の 短篇 集『羅生

門』の中に収められている『鼻』『芋粥』などがそれである。

昔、私の書いた『芥川龍之介』論を読み返して見ると、その頃の私は『羅生門』にひどく感服している。だが今日、読み直して見ると、『鼻』や『芋粥』の方が段違いに好い。

題材を平安朝に採りながら、尚かつ、大正初の進歩的インテリゲンチアに共通した新しい人間性への探究、つまり、有るがままの形における人間の姿、古い伝統の裏に隠されていた人間の真実の姿の発見、このあくなき努力をつづけると同時に、その題材の中へ、豊かにも優れた日本の詩情と、類なきまでに洗練された表現と、高い芸術的貴族性とを巧みに生かしている。しかも、それらの凡てが渾然とした形において良く融和されている点で、今日から見ても、十分な高い評価に値するものがある。

だが、芥川の作家的名声が最も高かった時代に書いたもので、そして、これらの平安朝ものの集中的大成とも見られるところの、中篇小説『偷盗』などになると、構成上の致命的な破綻や、徒らにたどたどして生彩を欠いた文章だけをとって見ても、澁澁とした初期の作品に較べて、格段の見劣りがする。

ことに『偷盗』には、部分部分の描写においてさえ、いろいろな破綻が見られる。最初の、太郎と次郎との心理分析、性格の説明が長い割合に、後半、事件の波瀾が烈しく盛り上がって来る部分の描写が不十分だ。ことに次郎が侍達に囲まれながら、血路を開いて逃げるあたりの描写などは、ひどく刃が鈍っている。事実、呼吸もつけないくらい緊迫した場面でありながら、意外に生気がない。芥川に剣道の心得がなかったことも、こういう斬り合いの場面を生き生きと描き上げることの

出来なかった一つの原因だろう。

事実、剣を取っての乱闘の描写には、何といっても、中里介山の『大菩薩峠』第一巻の、上野山王台の月夜に、劍客島田虎之介が、土方歳三とその一党を斬って斬って斬りまくる、あの呼吸づまる凄惨な描写に、好く及ぶことのできるものは、最近の日本文学中に一つも見出せない。『大菩薩峠』という小説は、随分ひどい出鱈目の偶然性の上に構成された大衆小説ではあるが、あの場面だけには、不思議に天才的な威力が見られる。これも、中里介山が好く剣道を理解しているためであろう。そこへ行くと剣道を知らない芥川の斬り合いは、全くお話にならないくらいナマクラである。

ただ、次郎が野犬にとりまかれて逃げるに逃げられず立ちすくむ所は、『偷盜』全巻の中で、描写が十分な生彩を帯びて躍動しているたった一つの場面である。これも犬に襲われることを人並以上に怖れていた芥川の性癖が、自らにしてこれだけの凄味を生み出させたのではあるまいか。

『偷盜』の中でも最も好くはないと思われるのは、作者が自身の気持ちを作品の動きによって救われようと焦ったために、最後に到って「善人榮えて悪人亡ぶ」という旧い江戸文学的な手法にならって作中人物の跡片づけをしたことである。それがあの作品の結末に、何となく不自然な感じを与える根本的な理由である。

切支丹ものには、今日、読み返して見て、更めて感心できるような作品は、残念ながら一つもない。下手な思いつきから出発した作品でなければ、欧州の作家、ことに、アナトール・フランスやレニエの作品などから、寄せ集めて来て、却って下手な編み直しをやったとしか考えられないもの

が多い。切支丹ものを、このようなロマンティックな姿において書きこなすためには、芥川の空想力は決して十分であったとはいえない。それが一作毎に、何らかの形における失敗を生む原因である。

今日、読み返して見て、一番、力強い感銘をうけるのは、初期の歴史小説『忠義』である。私が昔書いた「芥川龍之介論」を読み返して見ると、当時の私はどういうものか『忠義』には、そうまで大して感心していない。これは二十年前の私に、文学というものが、まだ、ほんとうに解っていないかったためである。

『忠義』はその構成法、ことに、文章の字句の鍛錬の上では、森鷗外の影響を可なりうけている作品である。だが、その人生観には、森鷗外のそれとは全く傾向を異にした芥川龍之介独特のものが、はっきり生かされている。その点だけでも十分な評価に値する作品である。

この作品の取り扱った主題は、既に形式化したために人間と人間性とを蹂躪して省みない封建的因襲道徳に対する、真に人間的、人性主義の挑戦にある。「お家」のためならば「お家」の当面の主人をさえも犠牲にして省みない、極めて非人間的な形式主義的忠義、いいかえれば、「お家」の主人の人間的な要求を圧殺し、その人間性を無視しても、封建的物質主義の社会的基礎である「お家」を守りぬこうとする打算主義的忠義に対して、家よりも人間を重んじることによって、いいかえれば、家という封建的な社会的単位よりも、主人という人間的単位を重んじることによって、封建的因襲道徳、形式主義的忠義のために長らく蹂躪されていた個人主義的人間性に対する新しい防衛を企てた点で、たとえ家老田中宇左衛門は斬首の重刑に処せられたといえども、明らかに人間性

の新しい勝利を示した点で、この『忠義』の一篇は近代日本文学中でも、十分高く評価されて好い作品である。

『忠義』に較べると、晩年の歴史小説は『お富の貞操』などの例に見ても、随分見劣りがする。ことに、一寸した思いつきから出発した『報恩記』などは、一倍、破綻がひどい。

凡そ芥川龍之介という作家は、世間一般でいわれているような、才氣溢れるが如き作家では断じてない。却って異常な刻苦精勵、鏤身彫骨によって、始めて完璧な作品を作ることのできた作家である。だから、文壇へ出ようとして、全力を挙げて完璧を期していた初期時代の作品と、既に名声揚がって濫作を余儀なくされていた全盛時代の作品とは、後年になって読み返して見ると、その芸術的価値において、却って反対であるという皮肉な現象が生じるのである。

『或る日の大石内蔵之助』も、矢張、思いつきから出発した作品であって、眞の芸術的創造性から生み出された作品ではない。従って芸術品として第一義的な価値を持ち得ないという意味からいって、世間で評価しているほど高く評価されるべき作品ではない。しかし、ここでは、思いつきか思いつきなりに、大した破綻なしに生かされている。ことに封建的イデオロギーの偶像としての英雄主義に対する、ブルジョア・リベリストの立場からの偶像破壊、英雄的仮面の剝奪という主題が、手際よく生かされている点で、決して失敗の作とはいえない。『手巾』や『將軍』とともに、芥川の反封建主義的な進歩性を明示している点で、矢張、注目されるべき作品である。むろん、構力力の強い点でも、更に一段の進歩性をふかめている点でも『將軍』の方が一倍すぐれている。後半期の作品の中で、私は『秋』と『玄鶴山房』、ことに『玄鶴山房』を一番高く評価している。

全体として、あの作品は非常にくらしい。その暗さにおいては、人間生活にとってもうこれ以上は耐えられない極限にまで追い詰められた暗さである。しかも、このくらさが、ひしひしと痛いほどの眞実性をもって読む者の心に迫るところに、あの作品のまれに見る力強い実在性がある。『玄鶴山房』において芥川は『父』以来企て来たって容易になしとげ得なかった人間性追究の一の極致、小市民生活の救われ難い人生の絶望への一つの極限へ到達することができた。殊に、晩年の芥川は、若き日の芥川のように、例えば『偷盜』の中の人物のように、作者が自身の心を救いたいばかりに作中の人物を不自然に生かしたり殺したりするような事はしないで、どんな絶望的な救われな生活であろうとも、その人物の置かれた環境と性格との、自らなる動きのままに動かして省みないところに、作家として又人間としての、一つの大きな進歩が見られる。それは自然主義以上の自然性、いいかえれば、救われ難き暗さの中に身をおきながら、しかも、安易な諦観に身をまかせず、苦しみぬくことによってますます絶望のふかさを増す点で、一つの人生のある極点に達し得たという意味においてである。

『蜜柑』や『葱』のような一寸した作品の中に、今見ると案外、芥川の好いところが見られる。

『蜜柑』の中には芥川の心の底ふかく隠されていた美しい人情、純な人間の愛情が美しく生かされているし、『葱』には一つの社会的現実に対する批判、つまり、恋愛の唯心主義に対する実生活的唯物主義の残忍な裏切りという観点からの人生批判が鋭く示されている。ただ『葱』の場合は作者が読者並びに批評家に対して「さあ、好いか、おれは今からタガを外すのだぞ。見てろ。好いか」というようなことをいいながら、案外タガを外さずにいる点が好くない。もし、あんな余計なテレ